

# 『うつほ物語』 「蔵開」 「国譲」 卷の脇役たち

— 情報過多の世界の媒介者 —

千野裕子

「キーワード」 ① 『うつほ物語』 ② 立坊争い ③ 乳母・乳母子 ④ 情報／噂

はじめに

『うつほ物語』の「国譲」の卷々は藤壺腹皇子と梨壺腹皇子を中心におこる立坊争いをえがいたものである。後の宮の過激なまでの暗躍によって正頼が塗籠に籠るまでの事態になるが、結果として藤壺腹皇子が立坊する。春宮は藤壺を寵愛しており、藤壺腹皇子の立坊は予想できた結末である。にもかかわらず激化する立坊争いの物語には、人物たちの思惑のすれ違いによる機能不全の会話や真実をとらえていない世間の噂によって「精神的喧噪に覆われた闇の祝祭世界」が立ち現れているとされている。<sup>注3</sup>

立坊争いを大きくしていくものとして「国譲」の卷々における噂の機能は非常に重要である。「国譲」の卷々には「人々」という曖昧な表現による出所不明の噂が多くえがかれ、正頼らはそれに振り回されている。しかし、その一方で、固有名を持

ち、確かな設定を与えられた女房や従者といった脇役たちが媒介となつて情報をもたらず場面もある。特に藤壺は彼らを使つて情報収集に励んでいる。真実をとらえていない匿名の人々による世間の噂の一方で、これら固有名を持つ脇役たちがもたらす情報が存在すること。それは立坊争いの物語の中でどのように機能しているのだろうか。本稿では「蔵開」から「国譲」にかけての卷々を、情報の媒介者たる脇役たちに注目することで、立坊争いをえがき出す『うつほ物語』後半部の方法を見い出していきたい。

## 一 韃負の乳母

『うつほ物語』には情報の媒介者として重要な働きを見せる女房たちがいるが、彼女たちは物語の最初からその機能を果たしていたわけではない。物語の前半部、いわゆるあて宮求婚譚においては、女房たちの活躍は限定され、藤壺と求婚者たちの

仲介の役割に終始していた。その徹底ぶりたるや、藤壺づき以外の女房が登場しないという有様であった。<sup>註4</sup>しかし、藤壺が入内すると、典侍のような内裏女房をはじめとする、藤壺づき以外の女房たちが多く登場することになる。そして、その役割も男女の仲介にとどまらないものとなる。特に多く登場してくるのは乳母たちである。藤壺・女一の宮といった主要な女性たちが次々と出産していく中で乳母の登場は必然ともいえようが、しかし、生まれた子供以外の乳母も多く登場し、重要な役割を果たすことになる。そのひとりが、「蔵開・上」巻に登場する朝負の乳母である。

「蔵開・上」巻、仁寿殿女御は女一の宮の出産に際して里下がりした。やがていぬ宮が誕生すると各所から産養の贈物が届けられることになるが、以下に引用する仁寿殿女御の行動に注目したい。

また、女御の君、梨壺より奉れ給ひし黄金の瓶に供御を入れ替へて、それに添へたりし鯉、小鳥・日乾し、餌袋に入れながら、藤壺より奉れ給へりし雉添へて、内裏に奉れ給ふとて、心ざしありて仕うまつる朝負の乳母といふがもとに、御文遣はず。「日ごろ、もの騒がしくて、聞こえずなりにけれ、なか、それよりも訪ひ給はぬ。さて、これは、子持ちの御残り物なり。いと寒き頃なめるを、『風邪も遣らひ給へ』とてなむ。この雉などは、上に参らせ給ひて、交野にも御覧じ比べさせ給へ」とて、乳母のもとには、沈の高杯を五つ、白銀の壺の小ささに黒方入れ、蜜入れたる

黄金の蒜五つばかり、沈の寄せ切りたりし、紙に一包、青き色紙どもに包みて、五葉につけて奉り給へれば……

（蔵開・上 五〇五）

このように仁寿殿女御は梨壺と藤壺からの贈物を朱雀帝に献上しているが、その際、「心ざしありて仕うまつる朝負の乳母」を仲介にして、彼女にも別に贈物をしているのである。「乳母」とあるが、彼女は朱雀帝の乳母である。わざわざ「心ざしありて仕うまつる」と語られるあたりに仁寿殿女御の宮中における処世術がうかがえるが、これは見事に成功する。先に引用した箇所直後には、こうあるのだ。

乳母たち、台盤所に候ふ折にて、見れば、異命婦たち、「いづこよりあるぞ。興ある物どもかな」と言ひ騒ぐ。乳母、「仁寿殿の女御の、『女一の宮の御産屋の残り物』とて賜へるぞや」とて、引き開けつつ見て、「いとをかしくしたりける物どもかな」、「ことわりぞや。左衛門督の君の御産屋の物、いかでかはかからざらむ」など言ひ合へり。

（蔵開・上 五〇五―五〇六）

このように贈物は台盤所にいた内裏女房たちの目にさらされ、「興ある物」であると評価される。さらにこの騒ぎは朱雀帝の耳にも届いていたようで、朝負の乳母が文を届けに来ると、朱雀帝は「朝負が語りつらむは、何ごとぞ」（蔵開・上 五〇六）と台盤所での先の会話に興味を示し、朝負の乳母は「この、鯉を押し寄せて切りて侍りつる物なんどぞ、これかれに賜ひつる」（蔵開・上 五〇六）と報告する。

ここに、仁寿殿女御の狙いがうかがえる。仁寿殿女御は内裏女房たちの世界がどのようなものか、後宮での生活の中でよく知っているはずだ。そのため、朱雀帝宛の贈物のほかに朝負の乳母宛の贈物も用意すれば、それは台盤所で他の女房たちの目にさらされ、分け与えられ、評価されるということも見越していたのだろう。『うつほ物語』の後半部において、女房たちは狭い貴族社会で噂を撒き散らしていく存在として機能している。そして、仁寿殿女御は帝の乳母という、女房たちのなかでも特に地位の高い者を味方につけることにより、宮中で高い評価を得続けようとしているのだ。その上、朝負の乳母らが台盤所で騒いだことにより、仁寿殿女御が内裏女房たちへの配慮を怠らなかつたことが朱雀帝の耳にまで入ることになった。朱雀帝の「朝負が語りつらむは、何ごとぞ」という問いも、仁寿殿女御の狙い通りのことだったのでないかと思われる。無論、「心ざしありて仕うまつる」朝負の乳母もそれを承知なのだろう。仁寿殿女御と朝負の乳母はある種の共犯関係にある。朝負の乳母は朱雀帝からの返事を仁寿殿女御に送る際、自らも文を書き、「賜はせつる風邪薬なむ、欲しく侍るべき」(蔵開・上 五〇六)と贈物の礼を伝えるとともに「御消息、『かくなむ』と奏し侍りつれば、御時よく御覧じて、御文侍り」(蔵開・上 五〇六)と朱雀帝の反応を報告するのだった。

ただし、ここでひとつ注意せねばならないことがある。確かに仁寿殿女御の評価は高いものとして内裏女房たちに共有されただろう。しかし、それ以上に、この贈物は「左衛門督の君の

御産屋の物、いかでかはかからざらむ」と仲忠の評価につながっている。いぬ宮の産養の贈物の再贈与なのであるから、仲忠の評価につながるのは当然のことだ。しかし、いづれおとずれる立坊争いを視野に入れたとき、娘婿ではあるが梨壺の異母兄である仲忠の高い評価は、仁寿殿女御(もしくは正頼一族)にとつて諸刃の剣である。

この場面の時点では、まだ梨壺の懐妊は明らかになっていない。しかし、『蔵開・中』巻によれば、なぜか仲忠が知るより先に后腹の五の皇子が知っていた。仁寿殿女御が知っているという可能性も捨てきれない。それでなくとも、ここに並んでいる藤壺と梨壺からの贈物は、両者の春宮をめぐる争いを象徴するものとして読み取れる。<sup>注6</sup>仁寿殿女御が藤壺からの贈物であった雉を朱雀帝に献上してほしいとした指示は「藤氏への牽制を込めた贈り物として再編成し、再贈与し」たものであるという。とすれば、この贈物が乳母たちに「左衛門督の君の御産屋の物、いかでかはかからざらむ」と評価されたということは、仁寿殿女御の行為が裏目に出たということになりはしないだろうか。

続く「国譲」の巻々で藤壺が里から様々に春宮の情報を得ようとしたように、ここではそれに先駆けて、仁寿殿女御による乳母を使った情報戦略がえがかれている。そしてそれは、やがて訪れる立坊争いの構造を浮かびあがらせるものとなっているのである。

## 二 典侍

朝負の乳母以上に『うつほ物語』後半部で注目すべき女房といえ、典侍であろう。伺候名は示されず、「典侍」とあるのみ的人物である。彼女は、

この典侍は、院の太后の宮の人、若くより、かく、よき人の御生子みに仕うまつり給ふ人なり。歳は、六十余ばかりなり。  
(蔵開・上、五〇七)

と紹介されている。「蔵開・上」巻は嵯峨院の太后の宮の六十賀から五年が経過しているので、典侍の「六十余ばかり」という年齢は、嵯峨院の太后の宮とほぼ同世代ということになる。嵯峨院の太后の宮の女房であり、若くから多くの出産に立ち会ったというが、随所にある典侍の発言を総合すると、彼女は藤壺・女一の宮・師澄の子・仁寿殿女御の子の出産に立ち会っているようであり、大宮との強い結びつきがうかがえる。おそらく大宮の出産にも立ち会っているのだろう。また、乳母経験者が典侍に任じられることが慣例化されるのは後一条朝以降であるが、早い例を求めれば、円融天皇の乳母の良岑美子が典侍になっていることや、『枕草子』にも「御乳母は、内侍のすけ、三位などになりぬれば」(「位こそ、なほめでたきものはあれ」段 二一八)とあることなど、『うつほ物語』の成立時期と近いこの背景を考えると、この典侍は朱雀帝の乳母であった可能性もある。

この典侍は情報の媒介者としての役割をたびたび果たす。女

たちの容姿を比較して「ただ今の人は、三条殿の北の方ぞ一、藤壺二、宮三にこそおはすめれ。男は、御前」(蔵開・上 五〇九)と言うところは、藤壺を第一としてきた物語の転換点として従来も注目されている。<sup>註11)</sup>

典侍は仲忠に「いみじうも、物言ふものかな」(蔵開・上 五〇九)、女一の宮に「いとよく物言ふ姥」(蔵開・上 五〇九)と言われるが、非常に重要な情報をもたらしている。

宮、おはしまして、何ごとにかありけむ、聞こえ給へりしかば、うちむつかりおはしまして、御髪を繰り出でて、御座のままにうち滑させ給へりしを見奉りしかば、聲しかけたるごととして、筋も見えず、隙もなく、同じやうに見え給ひしかば、よろづのこと忘れ、齡延ばはる心地こそし侍りしか。さるは、この頃、御気色にやあらむ、例のやうにも思したらざめり。  
(蔵開・上 五〇八)

おそらく典侍は藤壺の髪の素晴らしさを語りたかったのであるが、藤壺が「うちむつかり」と機嫌を損ねたことを語っていることに注目したい。典侍は「御気色にやあらむ」と懷妊による影響であると考えているが、春宮との夫婦仲に関しては、後に藤壺自身が祐澄に、「むつかしきままに、目も見合はせ奉り給はずむつかれば、『心よからず』とは思されたためり」(蔵開・上 五一二)と語っていて、実際に衝突らしいことがあったことが分かる。

一方、朱雀帝の三の皇子(仁寿殿女御腹)は「先つ頃、召しありしかば、内裏に侍りしついでに、かの御局にまうでたりし

にも、いと思ふやうにておはずめりき」(藏開・上 五二一)

と証言している。三の皇子は春宮と藤壺の夫婦仲を理想的と見ているのだ。こうした人物による認識の違いが描かれるのは、会話文を多用する『うつほ物語』の方法がなしかつたことだろう。<sup>注12</sup>

この場合は、藤壺の発言から考えるに、典侍の方が三の皇子よりも藤壺の自覚している実情に近い認識ができていたことが分かる。藤壺の自供だけでなく、三の皇子の誤認が描かれることで、典侍の情報は信頼性が高いものとして位置づけられている。

典侍は仲忠のもとにのみ情報をもたらすのではない。忠雅の北の方である正頼の六の君にいぬ宮のことを問われると、「ただ、父おとど、今少し小さくて、気近きにこそおはずめれ。日に二度三度はありし御文に、『人に見せ奉り給ふな』とのみありしかばこそ侍りけめ。藤壺の御方よりも、生ひまさり給ひなむかし」(藏開・下 五八四)と答えている。しかし、やはり仲忠に語るものとは情報の質も量も違う。正頼の六の君に対してはいぬ宮の美質しか語らなかつた典侍は、仲忠のもとに帰るや、正頼の六の君・五の君・八の君について語り、さらに、以下の情報を語る。

いかなるにか侍らむ、大納言殿、御仲違ひにて、日ごろは、夜ごとにおはして、簀子になむ居明かし給ふめる。御格子は、とく下ろして、鎖し巡り、人、物聞こゆれば、いみじうさいなめば、ただ一所なむ。一夜は、いとほしがりて、中納言の君対面し給へりしかば、それも追ひ出でられてなむ。(藏開・下 五八六)

典侍は仲忠に聞かれてもいないのに、忠俊と八の君の不仲を語るのである。これに対して仲忠は、「この君の御かたちは、いかがおはする」(藏開・下 五八六)や、「さて、源中納言殿は」(藏開・下 五八六)と、八の君やさま宮といった女たちの容姿について聞くとともに「中納言と君との御仲は、いかなるぞ」(藏開・下 五八六)と涼とさま宮の夫婦仲についても問うている。春宮と藤壺、忠俊と八の君の夫婦仲を聞かれもしないのに語ってきた典侍は、他からは聞き出しえない夫婦仲についての情報をもたらす者として認められ、仲忠もそれを聞き出すようになったのだ。

『うつほ物語』の後半部において夫婦仲は非常に重要な問題となる。ここで問題になっている忠俊と八の君の争いは、後に兼雅によって、

それ、去年の冬、『はかなき人に物言ひ触れて侍り』とてまかり去りて、親のもとに侍りければ、子の幼きを取り持てなむ、せむ方なくてもわび給ひけるが、からうして、この頃なむ、『あからさまに』など言ひて、渡りて侍るなる。

(国讓・下 七四七)

と語られている。引用したのは後の宮によって藤原氏の男たちが集められた場面で、梨壺腹皇子を擁立しようと画策する後の宮に対して、兼雅が男たちと正頼一族との姻戚関係を理由に諫めようとしている箇所である。これによれば忠俊と八の君の争いは忠俊の浮気が原因であったことが分かるが、この「国讓・下」巻に至って夫婦仲というのは夫婦の間だけの問題ではなく

なっている。男たちは立坊争いの影響で妻を失うことを恐れているし、<sup>注13</sup> 後の宮は梨壺腹皇子擁立のために男たちと正頼の娘とを離縁させようとすらすらする。実際、この後で後の宮は自分の産んだ女三の宮と忠雅を結婚させようとし、それが原因で忠雅と正頼の六の君との仲は危機的状況に陥ることになる。

とすれば、典侍のもたらしした夫婦仲に関する情報は、きわめて政治的に価値のあるものであったことになる。

御方、「宮との御仲は、いかがある」と。典侍、「いかばかりめでたき仲ぞ。そは、先つ頃、こなたにおはしけるに、参りけれど、物聞こえ給はざりければ、五日六日、入り臥し給ひてこそは恨み奉り給ひしか。『御遊び、これかれし給ひしを立ち聞きしかば、御方の、琴の御琴をこの筋に遊ばししが、いとあやしかりしかな。同じやうなる物の音とは言ひながら、この族は筋異なることの、御前にて仕まつりては』となむ怖ぢ給ひし」 (国譲・中 六九六)

引用したのは藤壺と典侍の会話である。藤壺は仲忠と女一の宮の夫婦仲を典侍に聞いている。この場面の時点で、既に梨壺腹の皇子は誕生している。いよいよ立坊争いが本格化してくるこの段階において、藤壺が仲忠と女一の宮の夫婦仲を気にするのが、単なる興味であるはずがない。藤壺は立坊争いにおける仲忠の立場をさぐるために、典侍にこのような問いをしたのではなからうか。

立坊争いの影響を受けるのは、勿論、正頼一族の女君と結婚した者たちである。彼らの情報をもたす存在として、典侍に

はこれ以上ない人物設定がされている。朱雀帝の乳母の可能性があり、大宮からの信任が厚いこと。正頼一族の様々な出産に立ち会い続けたことにより彼らの内部に深くかかわっていること。現職の典侍として宮中の事情にも明るいこと。さらに、もとは嵯峨院の太后の宮の女房であったということは、藤原太政大臣家とも多少のつながりを残している可能性があること。こうした人物設定により、典侍は立坊争いにかかわる人物たちの内幕を知ることが可能になっている。物語はこのように典侍という人物を設定することにより、人間関係の中で情報網をはりめぐらせているのである。

### 三 蔵人これはた

藤壺が情報を得ようと利用した人物は、典侍だけではない。最も重要な人物は、里邸に退出した藤壺の文使いとして登場する蔵人これはたではないだろうか。これはたは、単なる文使いの役割を越えた働きを見せている。以下、これはたに關係する場面は非常に多いため、叙述順に番号を付して引用していく。

①かかるほどに、紫の色紙に書きて、桜の花につけたる文、  
宮より。御使、蔵人。 (国譲・上 六三五)

②明るるつとめて、宮より、御文あり。(略)御使、兵衛の君の兄、蔵人の、内許されたる。御前に参りて、「今宵は、ただ一所御遊びし給ひつつ、大殿籠らずなりぬ」と聞こゆれば、「庚申にこそはありつらめ」。

(国譲・上 六三九)

③「(略)世の中のはかなきにつけても、よろづの思ひ給へらるる」とて、藤の花につけて、兵衛の君の兄の、童なりしが、今は春宮の蔵人になし給へるを召して、「これ、太政大臣殿に持て参りて、人々あまたものし給へらむ、源宰相に定かに奉れ」とて賜へば、喜びて持て参る。かの御方の人は、皆見知りたり。殿にうちはへものし給ひて、兵衛の君語らひ給ひし時は、これを使にてぞ、御文通はし給へる。」

(国譲・上 六四四)

④「この御使は、誰ぞ」と問はせ給へば、「童名、これはたと召ししが、今は宮の蔵人に侍るなむ、参り来たる。君、「昔、むつまじかりし人」と思して、賜へるにこそありけれ。『ここに、忍びて立ち寄れ』と言へ」とのたまへば、簀子もなき、部に懸かれりける所なれば、そこに、物越しにてのたまふ(略)

(国譲・上 六四六)

⑤民部卿、「かう幸ひのものし給ふべき人なれば、さもし給はずなりにたるぞ」などのたまふほどに、春宮より、宮の進を使にて、御文あり。喜びて見給ひて(略)

(国譲・上 六四七)

⑥かくて、藤壺の御使は、帰り参りて、御返り奉らせて、人もなき折なりければ、侍りつるやう、のたまひつることを、くはしく申して、ありつる箱を見せ奉れば、開けて見給ひ、書きつけたる物を御覧じて、「これは見つや」とて賜ふ。

(国譲・上 六四九)

⑦春宮は(略)「昨日、一昨日は、物忌みにてなむ。かの、

『訪はむ』ともせられし人のもとに遣りたりしかば、かくなむ。殊に心地ありげなき人も、かうこそは思ひけれ。これにつけても、院の上なむ、いとほしく、行く先少なげに見え給ふを、『かくてあり』とのみ聞こし召すらむを、『この頃、ものせむ』と思へど、『心あり』ともや』と思へば、慎ましうてなむ。のたまはむにを。(略)」とて、例の蔵人して奉れ給ふ。

(国譲・上 六四九、六五〇)

①に挙げたのは、退出した藤壺に春宮から文が送られてくる最初の場面である。ここでは「蔵人」とだけあり、どういった人物かは明らかにされていない。続く②の場面で、この蔵人が兵衛の君の兄弟であることが分かる。「兄」(底本「せうと」とあるが、③・④に引用したように、かつて実忠との使いをしていたときに童であり「これはた」と呼ばれていたことが明らかされているので、当時すでに大人の女房であった兵衛の君にとつては弟に当たるだろう。①の「蔵人」がこれはたと同一人物であるかは明記されていないが、これ以降に文使いとして登場する蔵人は全てこれはたであると考えられるので、①の蔵人もこれはたと解して構わないと考える。

兵衛の君は「藤原の君」巻から登場する藤壺の最側近の女房で、乳母子である。ということは、後に「乳母子とて」(国譲・中 七四一)と明記されるのを待つまでもなく、これはたも藤壺の乳母子ということになる。女君に対して男の乳母子が登場するのは非常に珍しいことであり、その存在は注目に値する。これはたの姉である兵衛の君は、物語前半部のあて宮求婚譚

においては実忠との仲介をしていた。そして、実忠が社会復帰する「国譲」の巻々で再び仲介役になることになるが、まず使いになるのは兵衛の君ではなくこれはたであつた。③に挙げた場面で、これはたは実忠宛の藤壺の文を持つていく。「殿にうちはへものし給ひて、兵衛の君語り給ひし時は、これを使にてぞ、御文通はし給へる」とあるが、そのようなことは求婚譚のなかで語られていなかった。かつての求婚譚では、藤壺のいる場所に男たちが文を寄越していたため、藤壺周辺の人物——実忠の場合であれば兵衛の君——をひとり仲介として登場させればよかつたのであり、これはたのような人物が登場する必然性はなかつた。しかし、今回出す使いは実忠から藤壺ではなく、藤壺から実忠にである。かつての因縁を考えれば兵衛の君が最も適任であるが、女の乳母子である兵衛の君は藤壺のそば近くに在るべきであり、使いに出不すわけにはいかない。そこで、兵衛の君と同等でありながら自由に動かすことのできる人物として男の乳母子であるこれはたが必要とされ、過去にも文使いをしていたという設定がされたのだろう。

この後、実忠が藤壺のもとを訪れる場面では兵衛の君が対応することになる。藤壺の傍近くでの対応は兵衛の君が、遠くへの工作はこれはたがというように、姉弟で連携しているのだ。実忠の社会復帰は立坊争いの中での源氏回復の物語であり、藤壺主導で行われたものである。姉弟の乳母子の連携という特異な設定は、そのために必要なことであつた。

これはたが実忠のいる季明邸に文を持つていった場面の考察

に戻りたい。④に挙げたように、実忠とも物越しに對話することができている。注目すべきは、⑤の場面である。これはたが実忠と対面した直後の場面であるが、同じ季明邸に春宮から宮の君への使いが来ているのだ。使いとなった人物は宮の進である。実忠とこれはたが言葉を交わしてから宮の進が来るまでの間には、実忠と実正のわずかな会話があるだけであり、宮の進とこれはたはち合わせてもおかしくない。そもそも、春宮からの使いが宮の進であつたのも、これはたが藤壺の使いのために不在だったからではないだろうか（これはたには藤壺への使いだけでなく梨壺や嵯峨院の小宮との使いとしても働いていることが示される場面もあり、決して藤壺の使いのみをしているわけではない）。これはたは季明邸で、春宮から宮の君に使いが来た様子を目撃したかもしれない。とすれば、⑥の場面で、藤壺にわざわざ「人もなき折」に「くはしく申し」たことなかには、その情報も含まれたのではなからうか。

これはたは藤壺に報告した後、春宮のもとに戻つた。⑦に挙げたように、翌日には再び春宮の使いで藤壺のもとを訪れている。そのとき春宮の藤壺宛の文の中には宮の君からの文が同封されていた。動きをまとめてみると、次のようになる。これはたは藤壺からの使いで季明邸に行つて実忠に会つた。藤壺のもとに戻つて報告を終えると、春宮のもとに参上した。これはたと同時か入れかわりに季明邸に来た春宮からの使いの宮の進は、宮の君からの返事を受け取ると春宮のもとに戻つた。そして、春宮は自分の藤壺宛の文に、宮の進から受け取つた宮の君の文



を同封し、これはたに預けて藤壺のもとに届けたことになる。

これはたと宮の進というふたりの春宮からの使いがニアミスする形で動いているのである。それが丁寧にえがかれることによつて、これはたと宮の進との接触も想定できる。これはたは単なる使いとしての働きだけでなく、春宮をめぐる情報を様々に入手できる存在であることが示されているのである。

これはたが春宮の情報を藤壺にもたらす場面は、これ以降もたびたびあり、立坊争いのなかで非常に重要である。

⑧かかるほどに、宮より、御文(略)。上、問はせ給ふ、「院の御方へは、いつか渡らせ給へりし。いく度ばかりか参上り給ひぬる。」藏人、「ついたち、上になむ渡らせ給へりし。さては、夜、一夜なむ参上り給へりし。上は、この頃は、講師、日々に参り、御書遊ばす。夜は、夜更くるまで、御手習ひせさせ給ひなむ」と聞こゆ。

(国讓・上 六五六)

⑨つとめて、春宮より、例の、藏人して御文あり。(略)藤壺、藏人に、「何わざか、この頃はし給ふ。誰々か、参上り給ふ。御文などは、人のもとに遣はすや」と問はせ給へば、「日ごろは、昼は、御書遊ばし、夜は、御手習ひ、飽くまでせさせ給ふ。院の御方なむ、この月となりて、三夜ばかり参上り給ひぬる。今日は、渡り給ひて、日一日なむ。さては、上り給ふ人もなし。御文は、左の大殿の御方になむ、一度侍りし。左の大將殿になむ、この月に三度ばかり奉り給へる。一夜は参り侍りてき。おとど、かの御方

におはします折にて、いとかしこく饗せさせ給ひき」

(国讓・上 六六五～六六六)

⑩かかるほどに、御使にはあらで、藏人まかであり。上、御前に召して問はせ給ふ、「梨壺には、御使、いく度か遣はしし」。藏人、「聞こし召さざりしに、「いたくわづらひ給ふことあり」とて、御消息申されたることありしになむ驚かせ給ひて、その夜、さては、今朝なむ参りて侍る。『男におはするなり』とて、『人は、さこそ言へ。つひにし給ひつめりかし。いかでか、おぼえぬ筋には』となむ申しのしる。」

(国讓・上 六六九～六七〇)

⑪宮より、よきほどなる、白銀・黄金の橘一餌袋、黄はみたる色紙一重覆ひて、龍胆の組して結ひて、八重山吹の作り花につけてあり。(略)大宮、御袋開けて見給へば、大いなる橘の皮を横さまに切りて、黄金を実に似せて包みつつ、一袋あり。大宮、「あなわづらはしや。いかで、こはせさせ給ひしぞ」と問はせ給へれば、例の藏人、「兵衛殿・中納言殿の、仰せ言受け給ひて、御前にて、これかれなむ仕まつり給ひし」。

(国讓・中 六九〇～六九一)

⑫「この頃は、誰々かものし給ふ。いづくにか、御使は、かく遣はす。内裏わたりには、何ごとかある」とのたまはすれば、「この頃は、例の御書遊ばしなどはせさせ給はで、『御心地悩まし』とて。参上り給ふことは、院の御方こそは。そこに候ふ、左衛門といふ人、忍びて申ししは、『五月ばかりより、御気色ありて悩ませ給ふ』となむ申しし。御使

は、一夜参り侍りしかど。申すまじきことなれど、内裏わたりには、梨壺の御方の御勝事し給へることをなむ、やむごとなき所々喜ばせ給ふなる。ある所には、「物の筋といふもの絶えぬと見れど、つひには出で来ぬるものなりけり。かかる折に、し合はせ給へること」とて、常に、ある所には、御文通はせ給ふとなむ承る。かの御方も、「とく参り給へ」と侍るなる」と聞こゆ。

(国譲・中 七〇三)

これはたは藤壺のもとに春宮の文を届ける際、必ずといつてよいほど春宮の情報を伝えているのだ。先に引用した②でも、聞かれもしないのに春宮が何をしていたかを伝えていた。⑧では春宮が嵯峨院の小宮のもとをいつ訪れたかという藤壺の問いに答えるとともに、やはり聞かれもしない春宮の近況を伝えている。⑨では藤壺からの問いがより詳細なものになっているが、それに対してやはり詳細な返事をして、これはた自身に梨壺のもとに使いに行ったことを伝えている。後宮の状況は藤壺にとつて最大の関心事であるが、これはたは藤壺の求める以上の情報を得ているのだ。さらに、⑩のように春宮の命を受けて贈物の支度をした人物が誰であるかも、大宮に問われれば答えることができていく。贈物の支度をした人物を聞くということは、誰が藤壺側についているのかを尋ねているのに等しい。これはたは、こういったことにも確認を怠らない。

そして、何より重要なのは⑩の場面である。これはたはついに春宮からの使いではなく、自ら藤壺のもとに情報をもたらすのだ。梨壺が男皇子を出産したことを報告するのだが、春宮か

らの使いが何度あったかという藤壺の問いにも答えることができていく。なお、梨壺が出産したとき、仲忠にも兼雅からの使いがあったのだが、

「宮より、御使はありつや」と問はせ給ふ。「知らず。え見給へずなりぬ」と申して参りぬ。(国譲・上 六六九)

というように、この使いは仲忠からの質問に満足に答えることができていない。春宮からの使いに関する似た質問があることで、二人の使いが鮮やかに対比されている。これはたが情報をもたらす存在としていかに優秀であるかが分かる。

これはたから情報を得ようとする藤壺や大宮の姿勢も興味深い。それ以上にその期待にこたえるこれはたが注目される。⑨や⑫にあるように、これはたは梨壺や嵯峨院の小宮への使いにも出ている。⑫では嵯峨院の小宮のもとで、左衛門という女房から小宮が懐妊したということ聞き出している。「忍びて申し」とあるからには、本来は聞き出しにくいことを聞き出せるだけの関係を築いていたのであろう。藤壺の乳母子であるこれはたを、藤壺のいわば政敵である梨壺や嵯峨院の小宮への使いにする春宮の真意は不明だが、これはたはその立場をいかして様々な場所に入りし、つてを作り、情報収集に励んでいるのである。

さて、その後の展開にも注目していきたい。

⑬かくて経給ふほどに、春宮より、「遅く参り給ふ」とて、ある時はあはれに心苦しげに、ある時は憎げに怨じ給ひつつ、日に従ひて、御使あり。その御使の藏人申すやう、「梨

壺のなむ、坊には居給ふべき』と申しなりにためり。御前にも、しばしば参上り給ふ。昼は、殊に渡らせ給はず。日ごろは、殊に御遊びもし給はず』と聞こゆれば、ある時は一行二行と聞こえ給ひ、ある時は聞こえ給はず。

(国譲・中 七二六〜七二七)

⑭かくて、春宮は、藤壺の、参り給はず、御返りも聞こえ給はぬを思ほし嘆きて、院の御方・梨壺なども久しうなむ参上らせ給はず、御局へも渡らせ給はず、つれづれと物も聞こし召さず、(略)これはたの蔵人召して、御文賜ひて、「これ、前々のやうにならば、さらに、な参りそ。候はせじ」と仰せらるれば、いたう嘆きて、持て参りて奉る。(略)蔵人「御返り持て参らずは、簡削らむ」と仰せられつるものを、特に勞りなさせ給ひて、とどめられ侍りなば、いと効なく」など申す。孫王の君を始めて、兵衛、「あこきを顧みさせ給ふ」と思ほして、しるしばかり聞こえ給へ。これがいたづらになりなば、いと悲しう」など、集まりて申す。君、「御返り聞こえずとて、御使を罪し給はば、わがためにぞあらむ。罪し給はば、『喜び』と思はむ。さばかりだに仰せられたらば、これにまさりたらむ職にも申しなしてむ」

(国譲・中 七四〇〜七四一)

⑮宮、「これは、乳母子とて、いとらうたくする者ぞ。これを解き捨てたらば、これがこと言ひに、文はおこせてむ」と思ほして、勤事に据ゑ給ひつ。(国譲・中 七四一)

藤壺は、⑬にあるようにこれはたの報告を受けて春宮への返

事を減らし、その結果、春宮は⑭のように嵯峨院の小宮や梨壺を相手にしなくなる。これはたの報告が、春宮を藤壺にますます執着させる結果をもたらしたのである。

藤壺が春宮へ返事をしなくなったことにより、これはたの身も危なくなつたのが⑭・⑮の場面である。これはたは春宮に、藤壺からの返事がもらえなければ除籍すると脅される。これには姉の兵衛の君も同じ側近女房の孫王の君も動揺するが、藤壺は除籍されたらそれ以上の官職に推挙しようと言って動じない。ここに、乳母子としてのこれはたの価値が発揮されている。⑮にあるように、春宮はこれはたが「乳母子にて、いとらうたくする者」であるからこそ、除籍するという脅しを使つた。これはたが乳母子であるということには、互いの切り札として利用できるだけの価値があるのである。藤壺もそれを分かつた上で動じないという強気の対応をしているのだ。<sup>注19</sup>

以上のこれはたの動きは、彼が男の乳母子として設定されているからこそ可能であつたことである。そもそも乳母子であつたからこそ藤壺の推挙によつて春宮の蔵人になれたのであろう。そして春宮も藤壺の乳母子であつたからこそ重用した。これはたはそれにより各所につてをつくり、情報収集に励むことができた。そして何より、乳母子でも男であつたからこそ、藤壺の傍を離れて自由に動き回ることができたのである。

#### おわりに

以上確認してきたように、朝負の乳母・典侍・蔵人これはた

といった脇役たちは立坊争いの物語の中で情報の媒介者として重要な役割を果たしている。そして、彼らの役割は、他の人物でも構わないという類のものではない。韋負の乳母であれば朱雀帝の乳母であることが重要であった。典侍は正頼一族に深くかかわる現職の典侍であるからこそ、それぞれの夫婦仲を知ることができた。これはたは藤壺にとって男の乳母子であるということが重要であった。

『うつほ物語』の後半部は様々な情報が行き交い、それらに動かされて物語が展開する。媒介する脇役たちには詳細な設定が付され、情報網はきわめて効果的に機能しているのだ。本稿で確認してきた他にも、物語は様々な情報網を用意している。藤壺に仕える孫王の君は物語後半部に至って上野の宮の娘だったことや妹たちが女一の宮やさま宮に仕えていることが明かされ、姉妹間の交流や上野の宮とのつながりが想定できるようになった。後の宮は自分の産んだ女三の宮と忠雅を結婚させようとしたが、そのことは女三の宮の乳母から聞いたこととして正頼の七の君の女房たちの間で話題になっていた。祐澄は女二の宮を略奪しようとして女二の宮の乳母の越後を買収するが、そのことは女一の宮の乳母の左近が知り、仲忠や女一の宮に告げられた。『うつほ物語』の後半部は、情報過多とさえない世界なのだ。

しかし、情報過多の世界であるならば、求められるのはそれを使いこなすことである。立坊争いの中で藤壺はさかんに情報収集に励んでいたが、それは功を奏したのだろうか。先に確認

したように、これはたは春宮に、藤壺からの返事がもらえなければ除籍すると脅された。それに対して藤壺は除籍されたらそれ以上の官職に推挙しようと言って動じなかった。その後、朱雀帝譲位の前日まで藤壺が何も言っていないため、春宮はこれはたの謹慎を解いたが、その後の春宮の藤壺への使いは「異蔵人」(国譲・下 七五二)が担当している。そして、朱雀帝の譲位後は、次のような状況になる。

帝は、かかることを、何とも思さず、ただ、藤壺の参り給はぬを、夜昼思し嘆けど、御使も久しう奉り給はず、后の宮の間こえ給ひしことをのみ、「心憂し」と思しつづ、御つれづれと眺めおはしませば、御乳母たち、命婦・蔵人などは、「かかる物の初めに、面白く興あることをこそ。かく、物をも思ほし嘆き、日々に御かたちの衰へおはしますこと」など言ふ。女御・更衣たち、参り集まりて、「身の効なくて、とてもかくても、めづらしからぬ世なりや」など言ふ。(国譲・下 七六二)

春宮(新帝)は藤壺の参内がないことを嘆き続けている。一方の藤壺はどうだろうか。

藤壺は、よろづに思ほせど、物ものたまはず、「帝の、御心を誤りにたればこそは、人は、かくは言ふらめ。かく言ふもしるく、御返し聞こえねど、立ち返り賜ひし御使も見えぬは、いかなるにかあらむ。このことは、げに、げに、さなりて、おとども、のたまふやうになり給はば、我も尼になりなむ。何か、世に交じらむ」と思はず。

(国譲・下 七六七〜七六八)

尼になろうかという悲壮な思いが語られているが、梨壺腹皇子が立坊するのではないかという不審を抱く根拠に「御使も見えぬ」が挙げられている。正頼も同じで、「内裏よりも、久しく御消息も見えねば、おとど、「このこと実に定まりなば、またの日法師になりなむ」(国譲・下 七六七)とあった。しかし、そもそも春宮からの使いがなくなったのは、これはたの一件がきっかけである。さらに、これはたの謹慎が解かれた後でも、春宮が使ったのは「異蔵人」であり、この蔵人はこれほどのように春宮の情報をもたらすことができていない。もし、変わらずこれはたが使いとして機能していれば、たとえ使いの回数が減ったとしても、「藤壺の参り給はぬを、夜昼思し嘆けど」という春宮の状態は報告されたはずであり、藤壺や正頼がここまで思いつめることはなかったはずである。

これはたは藤壺に春宮の情報をもたらすという極めて重要な働きをしていた。しかし、藤壺はそれを自ら断ち切ってしまったのだ。せっかく存在する情報網を、自ら使えなくしてしまった。これは藤壺の失策である。そして、これはたから情報を得ることができなくなった藤壺は、だからこそ「帝の、御心を誤りにたればこそは、人は、かくは言ふらめ」(蔵開・下 七六七)と、匿名の、出所のはっきりしない噂に惑わされるのである。

『うつほ物語』の後半部は詳細な設定を持つ脇役たちによる情報網が存在し、情報過多ともいえる世界になっている。しかし、鞠負の乳母を使っていたことが裏目に出た仁寿殿女御のよ

うに、これはたを自ら使えなくした藤壺のように、立坊争いのなかで情報網は必ずしも使いこなされているとはいえない。そして、それが機能しなくなった時にこそ、出所不明の噂が幅をきかせ、正頼や藤壺を疑心暗鬼に陥らせるのだ。噂<sup>法</sup>によって混乱をきわめた立坊争いの物語は、脇役たちの情報網が「使えない」ということによってネガティブに支えられていたのである。

『うつほ物語』の本文は室城秀之『うつほ物語 全 改訂版』(おうふう 二〇〇一)を用い、適宜傍線等を付し、括弧内には巻名とページ数を示した。

## 注

- 1 本稿ではあて宮の呼称は入内前の場面でも「藤壺」で統一する(ただし「あて宮求婚譚」とする場合は除く)。
- 2 室城秀之「藤壺腹皇子立坊決定の論理」(『うつほ物語の表現と論理』若草書房 一九九六)は春宮にとって藤壺腹皇子立坊が揺らいだことがないということを指摘するとともに、愛だけではない判断で決定したことを論じている。
- 3 伊藤禎子「闇の祝祭」(『うつほ物語』と転倒させる快楽)森話社 二〇一一)。また、神田龍身は「祝祭の変容と物語の生成」(学習院大学平安文学研究会編『うつほ物語大事典』勉誠出版 二〇一三)において「国譲」巻の「政治世界における男女の役割の転倒」を指摘し、

「個々人の性的トラウマ同士の葛藤という内面的祝祭劇として政治世界が構築されている」とした。

4 唯一の例外として忠澄の乳母の長門という者が登場するが、彼女も藤壺との仲介を期待して頼まれる女房の一人である。長門は藤壺づきではないことに意味がある。彼女を頼った滋野真菅が、藤壺の側近女房に近づけていないことを示すことによつて、婿候補にはほど遠いことが明らかにされているからである。なお、『うつほ物語』において物語の進展とともに女房の機能が変化していくことは拙稿「女房論」(前掲注3『うつほ物語大事典』所収)で指摘した。

5 新編全集の頭注には「仁寿殿の女御は政治的打算から、これまでも朱雀帝の乳母に配慮してきたか」(新編全集②三九五)とある。

6 この贈物に関しては小嶋菜温子「産ぶ屋」の賀歌(3)―『うつほ物語』いぬ宮の産養と「鶴」「雉」「鯉」(『源氏物語の性と生誕―王朝文化史論』有斐閣 二〇〇四)、西山登喜「うつほ物語〈モノ〉が見せる相関図―「再贈与」に秘められた女たちの牽制と闘争」(三田村雅子編『源氏物語のことばと身体』青蘭社 二〇一〇)などの論がある。

7 前掲注6西山論文。

8 底本「大宮」(国譲・中 七二〇)とあり「太守宮」もしくは「彈正宮」の誤りかとされている箇所である。い

ずれにせよ、文脈上、仁寿殿女御の子を指すと解して構わないと考える。

9 史上の典侍に関する先行研究には角田文衛『日本の後宮』(学燈社 一九七三)、加納重文「典侍」(『平安文学の環境―後宮・俗信・地理』和泉書院 二〇〇八)などがある。

10 新編日本古典文学全集『枕草子』(小学館)から引用した。三田村雅子「物語文学の視線」(『源氏物語 感覚の論理』有精堂 一九九六)。

12 室城秀之「うつほ物語の後半の会話文」(前掲注2『うつほ物語の表現と論理』所収)は藤壺腹皇子がいぬ宮を見た事件を例に「実際のできごとを語らずに、当事者たちの会話を通して描くことで、一義的ではない物語の読みの世界への広がりを持たせようとしているのである」とする。これもその一例といえるだろう。

13 前掲注3神田論文。

14 吉海直人「宇津保物語」の乳母達」(『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯』和泉書院 一九九五)。

15 なお、兵衛の君に関することとしては、在原忠保が親代わりであったことも注目される。忠保は「兵衛が親方にて、常に申さずれば」(国譲・下 八〇一)ということと修理大夫に任官する。室城秀之『うつほ物語 全改訂版』(おうふう 二〇〇一)の八〇一頁注九には「藤壺は、忠保が兵衛の君の親代わりであることを理由にし

ているが、実際は、自分への恋のために出家した仲頼に対する贖罪のためである」とある。兵衛の君は乳母子であることよって、実忠・仲頼という求婚譚で最も悲惨な末路を辿った者たちの救済に関わることになったのである。

16 前掲注3 神田論文。

他に男女の乳母子が登場する例としては、『源氏物語』の惟光・少将命婦・大輔命婦（惟光・少将とは異腹）が挙げられる。吉海直人「乳母子考」（前掲注14『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯』所収）でも指摘されているように、彼らの交流はえがかれぬ。しかし、『源氏物語』の場合、光源氏は惟光に対して夕顔の一件を少将命婦にも言わないように指示しており、むしろ『うつほ物語』とは対照的なあり方が注目される。これは、『狭衣物語』において狭衣の乳母子である道成・道季兄弟が情報交換しないことにもつながる問題である。

18 武藤那賀子「手紙論」（前掲注3『うつほ物語大事典』所収）は、これはたの言葉への信頼は春宮からの手紙の信頼を上回るものであると指摘している。

19 前掲注14 吉海論文は「両者の間には、真の親密さは想定できない」とするが、乳母子であるからこそ切り札になることに、これはたの価値を見たい。

20 宅間弥生子「噂論」（前掲注3『うつほ物語大事典』所収）は正頼家内部の噂の解釈の問題を論じ、「藤壺腹皇子立

坊に悲観的な噂を自ら取り込み、助長させ、さらには、正頼家の婚姻政策における政治的な穴までをも浮かびあがらせるものとして機能している」と指摘する。

（ちの・ゆうこ） 博士後期課程